

次の文章を読んで、後の問いかに答えなさい。

「ラララララララ～、さあ、ここから歌うように、軽やかに！ ララ～。」

先生が椅子から立ち上がる。声も拍子をとる手の動きも大きくなる。でも、鍵盤を叩く私の気分は乗らない。

「うーん、ストップ！」

先生は椅子に座り直し、しばらく黙つてしまつた。

「……啓子ちゃん、何か悩んでることある？」

先生、(A)【】星。さすがだ。

土曜日は、五歳の頃から続いているピアノのレッスンの日だ。もう八年間もお世話になっている西山先生は、私のことは何でも知っている。今、私の気持ちがピアノに向いていないことも、お見通しだ。

「先生、実は、ちょっと迷つてゐることがあつて……。」

私は、先生に話を聞いてもらひうことにした。

それは、水曜日のことだつた。

啓明学院中学校では毎朝チャペルに集まつて礼拝をおこなつてゐるが、水曜日はチャペルではなく、教室でクラス礼拝をすることになつてゐる。クラス礼拝では、生徒自身が聖書の言葉を選び、クラスメイトの前で話をする。自分のこれまでの経験や読んだ本、最近考えたことなど、みんなが聖書の言葉と関連づけて思い思ひの話をする。

四月に最初のクラス礼拝をおこなつてから一ヶ月あまり、クラスメイトの何人かがすでに話をしてゐる。私もそろそろ……と思つてていたので、この前の水曜日、思い切つて手をあげた。

「来週の礼拝、私が担当します！」

私は、クラスのみんなに話したいことがあつたのだ。

その日、いつものように仲良しの明子と優美と帰る途中、話題はクラス礼拝のことになつた。

「啓子、思い切つたね。私はまだ心の(a)ジユンビができないよ。」

「私も。それに、私は話したいことも全然思いつかない。」

「私も、もちろん緊張してるよ。でも、ちょっと話したいと思つてることがあるので。」

「ええっ？ もう話すこと決まつてゐるの！ 何、何？ どんな話するの？ ピアノのこと？ 勉強のこと？」

「せつかちな明子が①矢つきばやに質問してくる。

「うん。 私、啓明生の通学マナーのことを話したいと思つてゐるの。」

私たち中学一年生は、四月の新入生オリエンテーションで先生から通学マナーについて注意を受けていた。通学路を守ること、道いっぱいに広がらないこと、大声で話さないこと等々、当たり前のことだし、最初はみんなきちんと守つていた。

でも、ゴールデンウイークが終わり、友だちも増えてくると、歩道に三、四人が広がつて他の通行人の邪魔になつたり、おしゃべりに（b）ムチュウになつてどんどん声が大きくなつたりしてきた。

そんな様子を、風紀委員の横尾くんは気にしていた。先週も、道いっぱいに広がつて歩いていた男子四人組に声をかけていた。

「ちよつと広がりすぎだよ。もう少し右に寄つて。」

でも、みんな一向に寄ろうとしない。

「おっ、さすが風紀委員さん！ でも、大丈夫、大丈夫。先生も見てないし。」

「そうそう、みんなでしゃべりながら帰るほうが、楽しいしな。」

決められた通学路以外の道へ向かおうとする子を止めようとしている横尾くんを見かけたときもあつたけれど、その時も、

「だつてこつちの方が近いじやん！ それに先輩も時々通つてるしさ。」

と、みんなは横尾くんの言葉を気にかけていなかつた。

私も、通学マナーが乱れてきていることはわかつてゐた。いつしょに帰る明子と優美には、いつもその話をしていた。そして、横尾くんがみんなに注意していることも知つていた。

だから、私も、きちんとマナーを守ろうとみんなに呼びかけたかった。

今度こそ……。

「確かに、マナーの話をするにはいいタイミングなんぢやない？ さすが、啓子！」

優美は（c）サンセイしてくれた。でも、明子の顔は曇つていた。

「啓子、その話はやめときなよ。長い間続けていいピアノの話でいいじやん。この前、発表会あつたんでしよう？」

②優美はびっくりしたように明子を見た。

「えつ、なんで？ ③最近の中一つで、啓子の言つている通りでしょ？」

「それはそなんだけど、私もちょっといろいろあつたからさ……。」

明子が足下の小石をコツンと蹴った。ころころと坂道を (d) コロがつていいく小石を見ながら、④私の心はきゅっと縮まつた。

——知つてるよ、明子。

明子と私は、同じ小学校の出身だ。

あれは六年生の時だつた。運動会が近づき、昼休みに運動会の競技種目にある大縄とびや一輪車の練習に (B) [ ] を出す生徒が増えていた。休み時間の終了時刻ぎりぎりまで熱心に頑張るまではよかつたのだが、その一方で、使つた道具の片付けがどんどんおそらそかになつていつた時期があつた。体育倉庫の中で一輪車が散乱していたり、大縄がきちんと束ねられずにからまつてたり……。

体育係だった明子はどうしたものかと (C) [ ] を抱える日々だったが、ある日の終わりの会でどうとう⑤ [ ] をきらしてまくしたてた。

「最近、昼休みに使つた道具をきちんと片付けない人が多いと思います！ 決まりを守つてください！」

明子は教室中ににらみつけるような視線を送りながらそう言うと、どつかりと椅子に座つた。

教室はぎすぎすとした空気を漂わせながら、しんと静まり返つていた。  
担任の先生がいつも以上に明るい声でみんなに注意をうながす。

「先生は甘すぎるのよ！ 私がなんとかしなくちや。」

腕組みをしたままふんと鼻を鳴らす明子を尻目に、先生は終わりの会をお開きにした。

次の日の昼休みが終わるころ、⑥明子は早速考えを行動に移した。

「あなた、前もきちんと片付けてなかつたわよ。大縄はきちんと束ねて！」

「あ、そこのあなたたち、一輪車はきちんとそろえて立てかけるのよ。何でそんなこともできないの！」

そう明子が言つた時、私は、背後から聞こえてきた声に思わず振り返つた。

「何なのよ、あの言い方。これじや片付ける気もなくなるわ。みんなー、明子が片付けてくれるつてさー。」

「そう、そう！ それつて体育係の (e) ツトめだもんね。私たちじやダメなんだよー。」

「体育係の明子さん、どうもありがとう。ふん！」

——えつ？

倉庫の入り口のあたりにボールが投げ込まれ、(f) ムゾウサに置かれた一輪車の車輪は、まだからからと回つていた。  
明子に向けられた乾いた笑い声が、どんどん遠ざかつていつた。

——これつて……。

明子に向かれた乾いた笑

⑦ 気づいていながら何も言わずにこの場にいることがとてもよくないことのような気がして、私は息が苦しくなった。

明子は、だまつて大縄を束ねていた。こちらには背を向けているので、表情はわからない。でも、その背中はいつもよりずっと小さく見えた。せめて明子に声をかけて一緒に片付けようと思ったその時、他のクラスの先生が倉庫に来て言つた。

「おー君たち、次の授業で使うから片付けはもうそこまでにして早く教室に戻りなさい。」

「ありがとうございます。」

消え入りそうな声でそう言うと、明子は走つていった。

その日の五時間目と六時間目の授業は、先生の話も（D）上の【】だった。

「終わりの会でみんなに言おう。こんなのがダメだ。」

とは思うものの、いざ、自分が手をあげて発言する姿を想像すると、どきどきが止まらない。私の発言を、みんなはどんな顔で聞くのだろう。どんな反応をするのだろう。どんなことを言われるのだろう。私も明子のような目にあうかもしれない、という後ろ向きな想像ばかりが膨らんだ。自分できちんとせず、体育係に片付けさせるのはよくない。」

というのは、正しいことだ。でも、それを人に伝えるのは、勇気がいる。

「他に何かありませんか。」

担任の先生の声が聞こえてはいるのだが、私の手はなまりのように重かった。その日の終わりの会で、私は発言できなかつた。それからも、終わりの会で私の手があがることはなく、私は次第に、昼休みを教室で過ごすことが多くなつていつた。

運動会が終わり、いつのまにか⑧これまでのようなクラスの雰囲気に戻つたけれど、私の胸の中にはずっとしこりが残つていた。

——だから、今度こそ、手をあげたかつた。声に出して伝えたかつた。

わたしの話を最後まで聞いた西山先生は、静かに声をかけてくれた。

「啓子ちゃん、⑨今までの自分を乗り越えるチャンスよ。勇気を出して話してみたら？ クラスマイトを信頼してみたら？ 私は、啓子ちゃんの奏かなめが明るい顔で応援してくれる。でも、私は不安だつた。」

次の水曜日。

「啓子、今日の礼拝頑張ってね。啓子の話、楽しみにしてるよ。」  
優美が明るい顔で応援してくれる。でも、私は不安だつた。

教室の前に立つて、クラスメイトの顔を見る。みんなが、私を試しているように見える。

あの日と同じようにどきどきして、のどもからからだつた。目の前にある顔は、このあとどんな顔に変わるんだろう。  
あの日のクラスメイトの笑い声が聞こえる。  
怖い。

ピアノか勉強の話に変えようかな。

心が激しく揺れる。

私はぎゅっと目を閉じて、うつむいた。

——でも、私は乗り越えたい！

私は大きく息をすつて話し始めた。

「みんなは、最近、通学マナーを守っていますか？」

通学路を守ること、道いっぱいに広がらないこと、そして、風紀委員の呼びかけに耳を傾けるべきだということ。

話している間、⑩みんなの顔はよく見られなかつた。

その日の帰り道、明子と駅に向かう私の前を、同じクラスの男子四人組が、また道いっぱいに広がつて歩いていた。  
横尾くんがいつものように声をかけた。

「ちょっと広がりすぎだよ。もう少し右に寄つて。」

そして、いつものようにみんなは振り返つて横尾くんに答える。

「また横尾か、いつもがみがみうるさいよ。」

「そうそう、俺ら、誰にも迷惑かけてないし。」  
と、その時だつた。

「うわあっ！」

四人組の一人が前を向いて走り出そうとした瞬間、向かいから歩いてきたおばあさんとぶつかりそうになつたのだ。

幸いおばあさんがころぶことはなく、どちらも怪我をしなかつた。

でも、本当に危なかつた。

横尾くんは、通り過ぎていくおばあさんに「すみませんでした。」とあやまつてから、四人に向かつて話し始めた。

「今みたいなことがあっても『誰にも迷惑かけてない』って言えるのかな。」

今までに聞いたことのない、大きな声だつた。

横尾くんがさらに続ける。

「⑪マナーって、ただのルールとは違うと思うんだ。道に広がつて歩かないことは、お年寄りや小さい子どもも一緒に安心して歩くための思いやりじやないかな？ 急いでいる人に道を空けることも、同じ。さつきのおばあさんが、もしも自分のおばあさんだったら、どう？ みんな、思いやりのある行動をしようよ。」

四人は、黙つて聞いてはいるものの、(g) フフクそうに唇をとがらせている。

「ほら始まつた、風紀委員さんのお説教。そういう正しいことつて面倒くさいんだよ。」

「そうそう。もう、早く帰ろうぜ！」

四人が駅に向かつて歩き出す。あの時と同じ乾いた笑い声を立てながら。

「あなたたち、いい(h) カゲンにしたら！」

私は思わず大きな声を出していた。

「正しいことを話すのは、勇気がいるのよ！ 難しいことなのよ！ 横尾くんはずつとそれをしてくれてるの！」

驚いた表情で振り返る四人に、私は続けた。

「通学マナーを守るのは正しいことだけど、それを注意するのは、とても勇気がいることなの。私は小学生の時、その勇気を出せなかつたことを、今でも後悔してる。そのことがずっと心に引っかかつてた。あなたたちは横尾くんの気持ちを考えたことある？」

黙つて私の話を聞いていた四人は、いつの間にか神妙な顔つきになつていた。

「まあ、確かに、さつきのは危なかつたよな。」

一人がぼそつとつぶやく。

「まあな……。横尾の言う通りかもな。」

ばつが悪そうに四人は帰つていつた。

横尾くんはほつとしたような表情で、

「助けてくれてありがとう。(i) カンシャするよ。」

と言つて、駅に向かつて坂道を下つていつた。

その後ろ姿を見送りながら、明子が静かに聞いてきた。

「啓子、さつきの話つて、もしかして……。」

「うん。明子、あの時は「めんね。」

私は、体育倉庫で明子の状況に気づいていながら見て見ぬふりをしてしまったこと、そして、それからの思いを話した。

「そうだったんだ。でも、そんな昔の話、もういいよ。確かにあの時はちょっとキツかつたけど……、啓子が⑫そんな風に思つてくれていたってわかつて、(;) スクわれたよ。」

明子はさらに続けた。

「それに、⑬私に何が足りなかつたかわかつた気がする。」

「え? どういうこと?」

「私、あの時、何で一人で片付けるはめになつたかって考えてみたの。私は、自分は正しいのに何でみんなはわかつてくれないんだろうって腹を立てただけだつた。自分の思いを伝える努力をしていなかつたなあつて、今、気づいたよ。」

遠くを見つめる明子は、少しすつきりした表情だつた。

次の日の朝、駅から学校への坂道を上つていると、前の方に昨日の男子四人組が歩いていた。と、その時、その中の一人の声が聞こえた。

「おい、ちょっと端に寄ろうぜ。前から人来てるぞ。」

一瞬立ち止まりそうになつた私に明るい声をかけてきた。

「やつたね、啓子!」

「うん。あの時、勇気を出して本当によかつた。」

「ラララ～ララ～、さあ、ここから歌うように、軽やかに! ララ～。」

今日は土曜日。ピアノのレッスンの日だ。

先生が椅子から立ち上がる。声が、拍子をとる手の動きが、いつもよりさらに大きくなる。私の手も、踊るように鍵盤の上を滑っていく。

問一 線部(a)～(j)のカタカナを漢字に直しなさい。

問二 線部(A)～(D)が慣用句になるように、それぞれ【】に漢字一字を入れなさい。

問三 線部①「矢つぎばや」とはどのような意味ですか。次のア～エの中から最も適切なものを選び、記号を答えなさい。

ア 物事をしつこくするさま イ 物事をときどきするさま ウ 物事を続けざまにするさま エ 物事をいっせいにするさま

問四 線部②「優美はびっくりしたように明子を見た」について、それはなぜですか。その理由を解答らんに合うように答えなさい。

問五 線部③「最近の中一って、啓子の言っている通りでしょ?」について、「啓子の言っている」とはどうのことですか。

解答らんに合うように本文中から十三字でぬき出して答えなさい。

問六 線部④「私の心はきゅっと縮まった」について、それはなぜですか。その理由として最も適切なものを次のア～オの中から選び、記号を答えなさい。

ア 本当のことを隠して明子がじやまをしてくるのが許せなかつたから  
イ 明子が反対する理由に心当たりがあり、それを思い出すとつらくなつたから  
ウ いくら明子に反対されてもみんなに話すべきだとと思うと身が引きしまつたから  
エ 優美だけが何も知らないが、いつかは優美にも知られてしまうのがこわかつたから  
オ 明子の反対を押し切ることで明子を敵に回すかもしれないと思うと悲しくなつたから

問七 線部⑤が慣用句になるように、【】にひらがな三字を入れなさい。

問八 線部⑥「明子は早速考えを行動に移した」について、明子の考えとはどのようなものですか。解答らんに合うように答えなさい。

問九 線部⑦「気づいていながら何も言わずにこの場にいる」について、この状態を表す言葉を本文中から六字でぬき出して答えなさい。

問十 線部⑧「これまでのようなクラスの雰囲気ふんいきに戻つた」について、戻る前のクラスの雰囲気ふんいきはどのようなものでしたか。解答らんに合うように本文中から七字でぬき出して答えなさい。

問十一 線部⑨「今までの自分」とはどのような自分ですか。解答らんに合うように答えなさい。

問十二 線部⑩「みんなの顔はよく見られなかつた」のはなぜですか。解答らんに合うように説明しなさい。

問十三 線部⑪「マナーつて、ただのルールとは違ちがうと思おもうんだ」について、横尾くんはマナーとルールなどのように違ちがうと考えた。本文中の言葉を四字でぬき出して入れなさい。

マナーには【 】がふくまれている点がルールとは違ちがうという考え方

問十四 線部⑫「そんな風に思つてくれていた」について、明子は啓子がどんな風に思つてくれていたと考えていますか。答えなさい。

問十五 線部⑬「私わたしに何が足りなかつたかわかつた気がする」について、自分に足りなかつたものは何だつたと明子はわかつたのですか。本文中から十一字でぬき出して答えなさい。

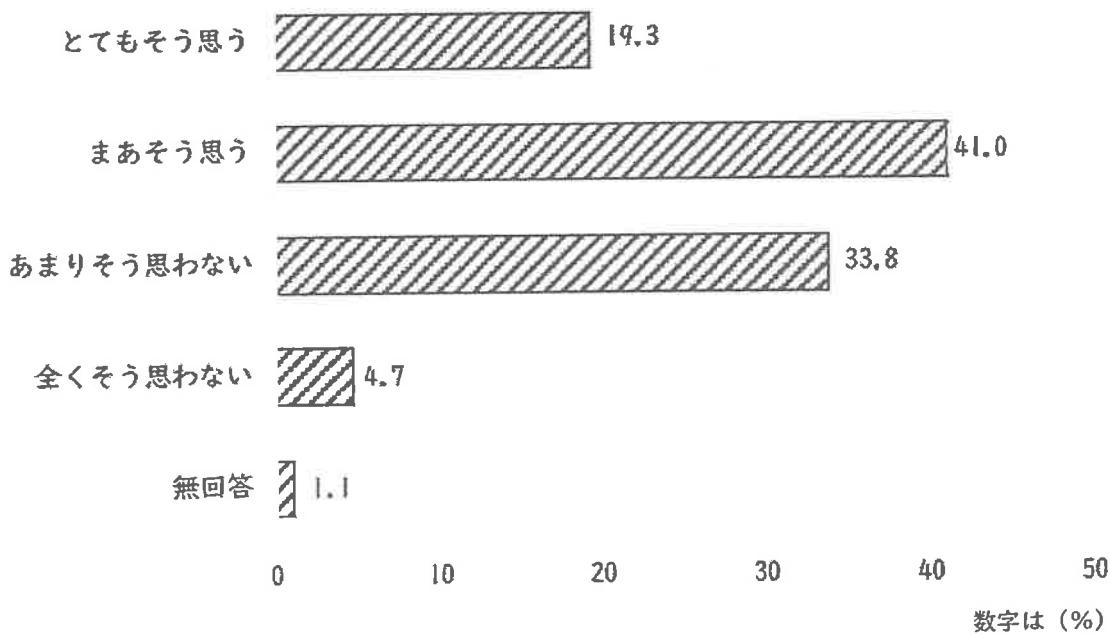
問十六

下のグラフは「自分の意志を持つて行動できるほうだ」ということについて、自身にあてはまるかを中学生に調査した結果を表しています。

あなたは何か行動するとき、どのようにするのがよいと考えますか。

- ア 自分の意志で行動する
- イ だれかに相談して行動する
- ウ どちらともいえない
- の三つの中から一つを選び、記号を答えなさい。
- そして、そのように考えた理由を、五十字以内で答えなさい。

## 自分の意志を持って行動できるほうだ



一般社団法人 日本児童教育振興財団内 日本青少年研究所  
「中学生・高校生の生活と意識 2009年2月」より

入学試験解答用紙 A方式【国語】

話】（一〇一年一月一六日実施）

(一〇一年一月一六日実施)

## 兌 番 号

得点

得 点

		間
f	a	
g	b	
h	c	
i	d	
		がつて
j	e	
われ	め	

問四 から

問五

11

八 と い う 考 え

問九

問十

問十一

問十三 マナーには  
がふくまれてゐる点がルールとは違ちがうという考え方

問十四

問十五

問十六 記号